

コリント人への手紙第一 13章13節 「信仰・希望・愛」

1A キリスト者の三本柱

1B 主と使徒たちの教え

1C 使徒たちによる三つ巴

2C 主ご自身の実践

2B いつまでも残るもの

1C 信仰

2C 希望

3C 愛

2A 一番すぐれているもの

1B 愛の表れ

2B 神ご自身の本質

3B 他者の益

本文

コリント人への手紙第一 13章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、12章まで来ていました。今日の午後に13章を一節ずつ学びますが、今朝は最後の13節に注目します。「**こういうわけで、いつまでも残るのは信仰と希望と愛、これら三つです。その中で一番すぐれているのは愛です。**」パウロは、12章から、御霊の賜物について話していました。御霊の賜物の現われが、いかにすぐれたものであっても、さらにすぐれた道があるとして、それが愛であると話しています。御霊の賜物が、一時的なものであるのに対して、「**いつまでも残るのは信仰と希望と愛、これら三つです。**」と言っています。

1A キリスト者の三本柱

キリスト教がキリスト教である理由とも言ってもよい、支柱になるような言葉です。信仰、希望、愛があつてこそそのキリスト教です。他にも、いろいろなことが教会にはありますが、そのエッセンス、本質と言ってよいのが、この三つ、信仰、希望、愛です。

1B 主と使徒たちの教え

1C 使徒たちによる三つ巴

使徒たちの教えには、この三つが絶え間なく語られています。テサロニケ第一 1章3節に、パウロが彼らに挨拶して書いた言葉がこれです。「私たちの父である神の御前に、あなたがたの信仰から出た働きと、愛から生まれた労苦、私たちの主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐を、絶えず思い起こしているからです。」信仰から出た働き、愛から生まれた労苦、そして主イエ

ス・キリストに対する望み、つまり希望です。その他の箇所にも、数多くパウロは書き記しています。

使徒ペテロは、第一の手紙で「1:3 私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。」と言いました。望みについて話しています。そして、「1:5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりの時に現されるように用意されている救いをいただくのです。」と言って信仰について語ります。「1:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており」と、愛について、話しています。そして使徒ヨハネは、第一の手紙で、まとまっては話していませんが、信仰、希望、愛をすべて強調しています。「5:4 神から生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。」信じることです。そして、希望について、「3:3 キリストにこの望み(=キリストの現れ)を置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」そして、愛については、何度となく語っています。「4:16 私たちは自分たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。」

ですから、使徒ヨハネ、ペテロ、そしてパウロ、みなが教えているのです。

2C 主ご自身の実践

それは、主イエスご自身が使徒たちに教えておられたからでした。律法の専門家が、律法の中でどの戒めが一番重要かを尋ねられた時に、イエス様は答えられました。「マタ 22:37-40 イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』38 これが、重要な第一の戒めです。39 『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。40 この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」愛することが最も大切な戒めだと教えておられます。

そしてヨハネ 13 章以降には、イエス様が、愛、信仰、希望の三つを織り交ぜながら、実践し、語られているのを見ることができます。「13:1 さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」愛を最後まで示されて、それで、弟子たちの足を洗われました。それから、「13:34 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」と命じました。

それから、ご自身が去ることについて弟子たちに語られた後に、「14:1 あなたがたは心を騒がせはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」と言われました。信じることについて強調しておられます。その後ですぐに、天にある住まいについて話されました。「14:2-3 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」再び戻られる

という約束をされました。つまり、希望について語られています。

2B いつまでも残るもの

このように、ひっきりなしに、信仰、希望、愛について、主も、主の使徒たちも語っていたのです。コリントの人たちは、御霊の賜物を中心に考えていましたが、それらはすばらしい神の恵みなのですが、信仰、希望、愛こそがいつまでも残るもの、これらをもっと求めないといけません。

1C 信仰

信仰というのは、「まだ見ていないけれども、それでもあることを確信して、信じる」という意味合いになるでしょう。「ヘブ 11:1 さて、信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」神がおられるのだろうか？とってしまうような時、目で見ている限り、そのようには思えないと感じてしまう時こそ、神がおられるということを確認していくことです。「11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」

牧者チャック・スミスの書いた本で、「愛 — さらにまさる道」というのがあります。日本語にも訳されています。¹その後でもう一つ、「信仰」というのも書いています。その中に、お孫さんのことが書いています。小学生の時に、まだあごに髭が生えていないのに、剃刀を当てて髭剃りをしていたそうです。髭が生えると信じて、髭剃りをしていました。これが、分かりやすい、信仰の喩えです。確かに、そのとおりになるのです。けれども、今は見ていない。なので、信じるのです。

そして、信仰というのは信頼です。一度、キリスト者ではない方から尋ねられたことがあります。信じるということと、信仰とは何か違いがあるのですか？と。信じるというと、対象が何でもよい、構わないということになります。イワシの頭も信心じゃら、という言葉もあるように、対象は問われない、一般的な言葉です。信仰は、明確に対象があって、その対象そのものに信頼を置いていることです。神が良い方、慈しみ深い方であることを信じる。イエスが神の御子で、キリストであることを信じる。この方が三日目によみがえられたことを信じる。信心深さよりも、その対象が大事です。

そして、この信仰こそが、いつまでも残ります。自分の周りのことが変わってしまっても、これまで信頼していたものが過ぎ去ってしまっても、信仰は残ります。天地が過ぎ去っても、残るのです。なぜなら、変わらない神に信頼しているからです。

みなさんの中で、つまずきそうになったことがあるでしょうか？疑いが多く出て来て、信仰から滑り落ちそうになったことがあるでしょうか？詩篇 73 篇にある、賛美の導き手アサフの書いたものは、まさにその心の葛藤を描いたものです。「73:13-15 ただ空しく私は自分の心を清め、手を洗って

¹ http://library.missioncalvary.com/translations/Japanese/ja_01095_LOVE__Chuck%20Smith.pdf

自分を汚れなしとした。14 私は休みなく打たれ、朝ごとに懲らしめを受けた。15 もしも私が「このままを語ろう」と言っていたなら、きっと私はあなたの子らの世代を裏切っていたことだろう。」もう、私、信仰を棄てます！と言ってしまおうようになっていた、ということです。これほど、やばかったのに、それでも立ち返ることができました。その秘訣が73篇の冒頭にあります。「まことに、神はいつくしみ深い。(1 節)」神は、慈しみ深い、または、良いお方だということです。神が良いお方なのだ、という真理だけは、手放さなかったのです。信仰は、どんな人生の嵐を通っても、このようにして、いつまでも残り、私たちを支えます。

それでイエス様は、何度となく、信じることが重要であることを語られました。長血を患う女に対して、彼女が群衆の中に紛れ込んで、必死に、イエス様の衣に触れれば治ると信じて触れたら、たちまち治りました。イエス様は、「マル 5:34 娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。苦しむことなく、健やかでいなさい。」信仰が、信頼があなたを救ったと言われます。

そして、不正の裁判官の話がされた時は、主が必ず報いてくださるのに、それを信じないでいる時代になっていくことを警告されました。「ルカ 18:7-8 まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」忍耐を働かせて信じていくのをあきらめて、せつかく主が速やかに裁かれるのに、肝心な時には信じていない、という警告です。信じていないという時代は、非常に嘆かわしいことを、弟子たちに語られたこともあります。「マル 9:19 イエスは彼らに言われた。「ああ、不信仰な時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」」信じることができない時代、不信仰な時代。これが悲劇ですね。

2C 希望

そして、希望もいつまでも残ります。希望とは、主がご計画を持っておられて、その良い結末を持っておられることです。私たちに約束してくださっていることは、必ず実現してくださることです。具体的には、主が再び戻って来られて、私たちに永遠のいのちをくださる希望です。(テトス 3:7) また天地を新しく変えてくださるという希望です。(黙示 21:5)この約束は、決して廃れることなく、いつまでも続きます。

使徒たちは、苦しみのあることを話す時に、必ず希望も語りました。「ロマ 5:2-4 このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいますが、3 それだけではなく、苦難さえも喜んでいきます。それは、苦難が忍耐を生み出し、4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。」8章でも、こう述べています。「8:18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示さ

れる栄光に比べれば、取るに足りないと私は考えます。」希望は、苦しみにある時にも、私たちを支えてくれる力を持っています。苦しみを経る中で、なおのことその希望を大きくしてください。

ダビデは、自分が落ち込んでいる時に、「主に望みを置け」と自分に言い聞かせることが多かったです。「詩 43:5 わがたましいよ、なぜおまえはうなだれているのか。なぜ私のうちで思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。私の救い私の神を。」このようにして、主が必ず良きに計らってくださることを信じて、希望を主に抱くのです。

3C 愛

そして、愛です。愛も、いつまでも残ります。愛という言葉は、私も語るたびに、座ることのない言葉だなと感じてしまいます。それが、ひとえに「感情」を示すからだと思います。感情を言い表すのが苦手な国民性ですから、「愛しています」と公言するのが憚れますね。

けれども、口に出さず、真実に愛するということは知っているはずで、ギリシア語では、主に三つの愛の言葉があります。肉体的な愛をエロス、感情や精神的なものはフィレオで、霊的なものがアガペです。アガペは、相手からの見返りを求めない、ただ与える愛、犠牲の愛です。ですから、真実に愛することは知っていますが、聖書は、はるかに深く、全く見返りを求めないどころか、敵さえ、我が子のように命を与えるほど愛する、深い、熱い愛を教えています。(ロマ5:8、Iヨハ4:10)。

真実な愛ですから、お気持ちで話す愛とは異なります。真実な愛には、必ず行いが伴います。「Iヨハ3:17-18 この世の財を持ちながら、自分の兄弟が困っているのを見ても、その人に対してあわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているのでしょうか。18 子どもたち。私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。」ですから、ですから、簡単に移り変わる、表面的な愛の言葉ではなく、いつまでも真実を込めて付き合ってくださいところの愛なのです。先ほど読んだヨハネ 13 章では、イエス様は弟子たちに最後まで愛を尽くされて、それで十字架につけられる前夜に弟子たちの足を洗われたことが書かれていました。その愛が真実なので、最後まで良くしてくださいました。

ところで旧約聖書には、「愛」という言葉が、新約聖書よりも少ないと思います。けれども、それは本当に少ないことを意味しません。愛とは違う言葉に訳されるからです。ヘブル語にも、いくつかの「愛」を表す言葉がありますが、真実な愛については「ヘセド(ἔσδος)」です。イザヤが預言して、こう語りました。「イザ 54:10 たとえ山が移り、丘が動いても、わたしの真実の愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない。——あなたをあわれむ方、【主】は言われる。」この同じ言葉で、私たちが交読しました、詩篇 136 篇があります。「136:1 【主】に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。主の恵みはとこしえまで。」恵みと訳されていますが、これはヘセドです。真実な愛、忠誠を誓う愛、契約の中にある愛です。すべて他者の利益のために動く愛です。そして、その他

者のためなら、自分のすべてを献げ、命までも惜しいとは思わない愛です。これは、どんなことがあっても廃れません。いつまでも続きます。

キリストがご自身の血を流されて示された愛は、いつまで続くか知っていますか？私たちが、罪深いからイエス様は血を流されたから、罪が取り除かれ、罪あるからでも変えられ、新しいからだになっている天においては、もう必要ないと思いますか？いいえ、天地が過ぎ去り、新しい天地に変わり、天からエルサレムの都が与えられました。そこに住んでいる人々は、光の中で行きますが、その光がどこから来ているか？「黙21:23 都は、これを照らす太陽も月も必要としない。神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。」とこしえの都の中でも、イエスは、ご自身が屠られた傷跡を、おそらく残しているのでしょう。その愛は、とこしえまで残るのです。

2A 一番すぐれているもの

このように、いつまでも残るのは信仰と希望と愛です。けれども、「**その中で一番すぐれているのは愛です。**」と、パウロは言っています。

1B 愛の表れ

それは、一つに、信仰と希望そのものが、愛の表れだからです。13章5節から7節には、愛が何であるかの定義が書かれています。その中に、こうあります。「13:7 **すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。**」すべてを信じて、すべてを望むということが、愛の表れの一部なのです。愛がある時に、人は信じます。愛がある時に、人は望みます。つまり、愛こそが、信仰や希望の源泉なのです。

2B 神ご自身の本質

そして、愛が一番優れているのは、神ご自身の本質が愛だからです。先ほど読んだヨハネ第一の箇所には、「4:16 **神は愛です。**」とありました。神は愛であると言えますが、神は信仰である、神は希望である、とは言えません。私たちが、神の愛に留まり、神の愛に支えられて、この方を信じ、この方を望むことはありますが、神が信じて、神が希望を抱くということはありません。愛は、それだけ、神に属する性質、いや本質であり、愛は、すべて神から出ているのです。

3B 他者の益

そして、信仰と希望と、それから愛を比べれば、信仰と希望は、私たちが抱くものです。神を信じ、また希望を抱きますが、そこにことにより私たちが支えられます。けれども、愛は限りなく他者に向かいます。自分ではなく、全体の益を望み、他者の益を望みます。

これが、パウロが、コリント人の手紙の中で、愛を強調している理由となっています。彼らは賜物や知識は望んでも、それが自分の利益のためであって、他者の利益を顧みなかったからです。

賜物も知識も、すべてが貴いものです。けれども、はるかにまさるのは愛であり、キリストを愛するから、人々を愛するから、初めて御霊の賜物が益となります。これが肉적인のか、靈적인のかの境目となるでしょう。自分のために生きるのではなく、キリストのために生き、そして他者のために生きます。

最後に、パウロが、エペソにある教会に送った祈りを読んで、終わりにしたいと思います。「エペ 3:17-19 信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。そして、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、18 すべての聖徒たちとともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、19 人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。そのようにして、神の満ちあふれる豊かさにまで、あなたがたが満たされますように。」